〔心理臨床センター開設25周年・新札幌キャンパス移転記念号によせて〕

ロールシャッハならびにMMPIについての雑感

札幌学院大学大学院臨床心理学研究科　**井　手　正　吾**

＊ はじめに ＊

ロールシャッハとMMPIは，私の心理臨床にとってひとつの大きな核となっている。心理臨床の路に踏み込んで間もない時，２年目に出会ったが，しっかりと向かいあわねばならなくなり惚れ込んだのは，少しは臨床経験を積んだ後，５年目であった。

このふたつを自分自身の臨床では可能な限り利用してきた。また医師のタマゴ，薬剤師という臨床スタッフを目指す者，心理臨床の後輩等，臨床家の養成教育の中でさまざまな形で取り上げてきた。さらに，スーパーヴィジョン等のある種の臨床活動の中で，できる限り重視してきている。

勿論，ロールシャッハやMMPIを使わなくても学ばなくても，臨床的な理解や関わりは学べるし深めていくことはできる。しかし，実際に臨床的に使用しなくても，それなりに試してみたり，ちょい学んでみると臨床家としての理論や技法について，より幅をもてると思うところである。

また，私の臨床にとってのかけがえのない貴重な道具といえるが，いつまでたっても使いこなせてないツールのようでもあり，良くも悪くも魅力が失せることないままである。それだけにロールシャッハとMMPIについて日頃まとまりなくいろいろ考えたり，思ったり，感じたりすることも多い。そこで，その一部をどうにかコトバにできるところで，自由連想的にまとまりなく著していきたい。

なお，この随想的な拙文の，土台というか，原点的な核になっている主な文献をあげておく。ロールシャッハについては片口（1960；1987）とEllenberger（1954／1964）さらに小野（1968）を，MMPIについては田中（1990）とDahlstrom & Dahlstrom（1980）があげられる。そして，ロールシャッハとMMPIを活用する診断や治療という臨床の基幹については，Freud（1917／1971）および神田橋・荒木（1976）と中井（1982）をあげておく。当然ながら，これらは原点であり，それらから拡がっていって何らかの関連をもつ多大な研究・論文や著書からの教えも受けている（かなり偏った出来のわるい学びかもしれない）。

＊ ロールシャッハ，MMPIとは ＊

ロールシャッハとMMPIは，個人のパーソナリティや心理的精神的な様相を幅広くとらえることができ，それ故その病理や障害の理解を深めることのできる非常に優れた心理臨床の道具・ツールである。

このふたつは著名な心理検査とされている。臨床心理学は勿論のことだが，心理学の入門的概論的なテキストでもとりあげられないことはなかろう。少し詳しいテキストでは，ロールシャッハは投影法，MMPIは目録法（日本では質問紙法と称されることが多い）の代表的な検査とされ対比的に並べられることが多い。

これは私が心理臨床の路に踏み入れた1970年代半ば過ぎ頃でも，また21世紀になって20年以上過ぎた現在でも，依然とそうなっているようだ。さらに，さかのぼれば私が生まれた1950年代半ばには，ふたつの検査は既に誕生し欧米を中心として世界的に活用されていた。実に長きにわたって使われ役に立つ道具となっている。このような検査は他にはあまりないといえる。

教科書的に取り上げられる投影法と目録法の相違を別としても，あまりテキスト的にはとりあげ

られないところでも，確かにこのふたつの検査は対照的といえば非常に対照的なところがある。

ロールシャッハは，スイスの一精神科医であるHermann Rorschachが，いろいろな仲間の協力もありながらも個人的な臨床活動の中から生み出したものである。かたや，MMPIはミネソタ大学のHathaway,S.R.とMcKinley,J.C.の二人が中心となった大規模なプロジェクトで作り出された。

ロールシャッハは1921年に産み出されたが，翌年1922年のHermann Rorschachの病死をはじめとする悲劇的な色合いも濃いその展開の歴史は比較的知られるところであり，実際的に大きく認知され活用されだしたのは1930年代半ば過ぎである。MMPIは，その構成や作成過程でいろいろな難題もあったようだが，1943年にミネソタ大学より公刊されてからは，順調というか早急に認知され活用されていった。

しかし，テキスト的にはあまり取り上げられないが，意外にもロールシャッハとMMPIには非常に似たようなところ，大きな類似点がある。いずれも，時間がかかる面倒な検査であるし，全体的なパーソナリティをとらえることができ，臨床診断や治療的な示唆に役に立つ検査とされている。そのような類似性の基盤となっているのは，いずれも精神科臨床をしっかりと土台にして産み出されていることだ。何よりも，患者をはじめとした人間の反応をもとにして，それをもとに人間全体をとらえていこうとしているところである。個人的には，非常に有用な臨床的ツールとしての最も重要な類似点と考えている。

Hermann Rorschachは，彼がいろいろと工夫して作ったインクブロット図版に対する沢山の患者や健常者の反応をとりあげて，それぞれの特徴や違いや共通性など，いろいろ幅広い側面をみていき，検討していった。それまでの内容重視の象徴的なとらえ方から，いわゆる形式的なとらえ方，図版の領域的なとらえ方や反応生成の認知的な側面，彫琢の程度や構成度など，が心理的・精神的な様々な側面と関連していること，また，それらを総合的に見ていくことで，患者や被検者の個性的な全体像をとらえていけることを感じ，ロールシャッハを生み出していったのだろう。

MMPIは，精神科臨床に真に役立つ目録法的な検査を作り出すということがひとつの大きな出発点であったといわれる。社会調査などでも用いられ工夫されている目録法，質問紙法であり，統計的手法を始めとして，その作成はある程度定型化されているところがある。勿論そのような手法も必要とされたが，Hathawayたちは，それまでの目録法検査とはかなり変わった異なるやり方でMMPIを仕上げていった。まず，精神的な病理やパーソナリティをとらえるための，かなり多量ともいえる500程の項目文章を準備した。回答の負担軽減を考えたのか，選択肢は「あてはまる」か「あてはまらない」かの原則２選択とした。そして，ひとつひとつの項目文章が名刺ほどのサイズのカードに書かれたものを２選択に分類していくという，目録法では他には類をみない用具を作って回答してもらった（いわゆるカード形式の用具が原点であり後に冊子形式が作成された。検査学的な効率性などから冊子形式が主流となっていき，MMPI-2からはカード形式の用具が公刊されなくなったのは，個人的には非常に残念に思うところである）。

そして，目録法検査では核となる尺度は，さまざまな患者や健常者の回答をあつめ，それを比較検討していき，後から作成・構成していった。いわゆる経験的手法，外的基準による尺度構成によってMMPIをまとめていった。それまでの目録法検査の基本的な（いわゆる論理的手法や内的基準による）尺度構成からみると非常識で真逆ともいえるようなやり方で，MMPIの骨格といえる基礎尺度を完成させていった（14の基礎尺度のうちＬ尺度は明らかな論理的手法による尺度であるが，他は被検者の反応を基に作成された尺度といえる）。項目文章という言語を用い選択的な回答を得るという目録法的な制約から意識的・無意識的な検査態度の影響は免れないことや，内的整合性に乏しく尺度のもつ臨床的意義が不明瞭などの問題点は指摘されたが，妥当性尺度の作成や基礎尺度の相対的布置（プロフィール・パターン）な

どもこまかに検討されていった。現実的な人間の回答（反応）を基に作成されたMMPIは臨床的に患者の精神病理や現実的なパーソナリティ像をとらえるために役立つものとなったのである。

ロールシャッハもMMPIも，以前からあった精神・心理理解のためのやり方（インクブロット検査，目録法検査）を，少し異なるとらえ方で作り直したものともいえる。いずれも，臨床的な原点である患者，被検者の現実的な反応を基盤として，それを詳細にとらえてまとめていった。とはいえ，ある意味，他の検査とは大きく異なったところである（目録法，投影法に限らず，大半の検査はある種の病理論やパーソナリティ論などの理論に基づいて作成される。ロールシャッハとMMPIは，そのような理論に基づかず，患者や健常者などの人間の反応を基盤にして作成された。それ故，さまざまに異なる病理論やパーソナリティ論などが解釈に適応できるようになっている）。

また，ロールシャッハとMMPIの研究量の多大さも類似点といわれ，その論文や書籍を主とする研究は数量的にも質的な幅広さでも，心理検査といわれるものの中では群を抜いている。これは，ロールシャッハならびにMMPI，いずれも刊行されて完成というわけでなく，その後も展開し発展しているという類似性にも関連しており，これも他の心理検査といわれるものとかなり異なるところである。

いずれも，多くの患者や健常者と向き合い，その直接的で現実的なあらわれ，姿を大事にしたいところである。その真摯に人間に向き合う基本的な姿勢が，人間の精神的・心理的ないろいろな幅広い総合的な側面の情報を引き出してくれる臨床道具を結果的に作り出したのであろう。

＊ 臨床こもごも ＊

しばしば，投映法であるロールシャッハは無意識的な深層面をとらえ，目録法であるMMPIは意識的な表層面をとらえる，と安易にいわれることがある。その作成や発展の経過をある程度しっかりと知れば，MMPIは本人が意識していない側面を大きくとらえていることやロールシャッハが現在の状況や環境に直接からむ意識的な心理状態もかなりとらえていることは，容易に理解される。

ロールシャッハもMMPIも認知機能にからむ知性的な特性からドロドロした欲求や感情の特質までの精神的心理的な様々な領域の情報をとらえている。過去のとらわれやこだわりから未来・将来への畏れやのぞみ等も，また，それらの本人が意識しているようなあり方からほとんど自覚してないような無意識的な様相までを，いわば，個人の隅々を網羅するような様々な情報を含んだ反応をひきだしているといえる。他の検査と比べると，ロールシャッハもMMPIも多大で濃厚な反応を求めるだけあって，ひきだせる情報も他の検査と比して莫大といえるかもしれない。

そうであるから，その結果を丁寧に詳細にみていくことにより，個人のより現実的，臨床的で総合的全体的な理解を深めていけるものであるし，患者・クライエントにかなりの精神的負担をかけている臨床家としては，そうしていかなければならない責任を負っているともいえよう。

ロールシャッハとMMPIにからむ研修会の討論で「心理検査のキングとクイーン」という喩えから，発展して「いや，ビフテキかウナギの蒲焼きか」と，くだけた雰囲気で盛り上がったことがあった。ロールシャッハはキングなのかクイーンなのか，MMPIはビフテキなのかウナギの蒲焼きなのか結論は出なかったと記憶しているが定かではない。

しかし，本拙文のような趣旨からの，ロールシャッハとMMPIでとらえられるところの差異というのは，実はあまり明確に検討されてないように思われる。コトバを刺激とし主に個人の内省的な活動で行われるMMPIは，より社会的でマクロなあり方をとらえているようである。インクブロットという視覚刺激で対人的なやりとりで遂行されるロールシャッハは，より個別的なやりとりでみられるミクロなあり方をとらえているように考えられるところではある。そのあたり，より詳

細な検討は何か意味あるところではないだろうか。

ロールシャッハとMMPIの差異に関連するが，身近にいる両者を活用している者でも当然ながら好みや得手不得手がある。

日本全体における現状では，何故かしら昔から俄然ロールシャッハに人気がある。MMPIは，かつては有名無実とでもいうような実態で，活用されているのは一部の研究版であった。新日本版や村上・村上版が公刊されて漸くまともに使われるような状況になったが，ロールシャッハと比べると雲泥の差といえるのが現状である。臨床的な活用頻度にも関連するのだろうが，関連著書や論文，研究量などについても同様である。

嘆かわしい実態はさておいて，しっかりと学んである程度活用できるようになった場合はどうであろう。はじめ，施行や結果処理にかなりの経験を必要とされるロールシャッハよりも，そのあたり比較的機械的に行えるMMPIの方が，結果による個人理解の難しさ，ならびに面白さをいち早く経験できるため，MMPIを好ましくやりやすく感じる者が多いような傾向がある。しかし，それなりに身につけていくとどうなるかというと，そう簡単ではないようである。必要な場合，いずれも優先的に使用するし役立つものと評価しているが，好みや得手不得手というものは大なり小なりでてくる。何となくこちらがやりやすい，何故かしらこっちが好きといったところは，ロールシャッハとMMPIは半々というような感じである。

いずれも，いろいろな特性を複合的に反映している多量の結果を，ジグソーパズルを組み合わせるように，病理や健康的な側面も含めた理解を深めてまとまりをつけていくようなところがある。このような好みや得手不得手といったものは，比較的わかりやすい検査刺激や処理法の違いも，理解を深められるところの微妙な差異というものが関係しているのであろう。やはり「ビフテキかウナギの蒲焼きか」というところになるであろうか。このあたり以前からちょっと面白く興味深く感じており，臨床家としての自己分析にも役立つかもしれない。誰か詳細に検討して欲しくもある。

ロールシャッハもMMPIも，学問的には初期からいろいろ批判されることも多い検査であったが，臨床的には活用され役立ってきたのも事実である。しかし，将来どうなるのか分からないところもある。ロールシャッハもMMPIも様々な偶然や運の良さがからんで誕生したようなところがある（ロールシャッハの図版の印刷にからむエピソードやMMPI-2やMMPI-3ではなし得なかった経験的手法による基礎尺度，等々）。いずれもある意味，非常に人間くさく泥臭い臨床ツールであり，科学的にはなかなか割り切るところがまだまだ難しい人間の精神面心理面を，生々しくとらえていくのに役立つところが大きいのであろうし，そのような臨床的なアプローチは排除できないものであって欲しい。

＊ さいごに ＊

恩師・片口安史先生の研究室に「夏炉冬扇」と達筆で書かれた色紙が飾ってあった。夏のストーブ，冬の扇風機，場違いな無用なものというような意味合いである。

専門家はついつい自分たちの道具ややり方・うけとり方を非常にすぐれた有用なものと思ってしまいがちである。しかし，それが正しいのか真実なのか，わかりにくい。少なくとも，もっと違った役立つ道具ややり方・うけとり方というものもあるかもしれない。特に精神的・心理的なところでは，そのような真摯な態度が，専門性を高めていくことにもつながる。ロールシャッハもMMPIも，無用のもの，場違いなものというところもあるだろう。検査を実際に受ける患者やクライエントにとってはそう感じる人も少なくないかもしれない。無駄に長い時間だけをとられたような検査にしないためにも，臨床家として，より適切なやり方・うけとり方ができるよう，いろいろな面で努めていきたいものである。また，夏の炉（いろり）や冬の扇（せんす）も，どうにか工夫すれば役立てることができるかもしれない。あらためて，そのような日常での姿勢が臨床では大事なことと思うところである。

「夏炉冬扇」とは，KaRo Inkblot Testにからめた言葉でもあるのだが，片口先生の臨床家とし

ての謙虚さを（そして奥底には厳しさも）感じるところであり，またロールシャッハやMMPIなども活用する臨床の後輩への箴言であるようにも思えて今後も大事にしていきたい。

謝　辞

この拙文は，コロナ禍などの諸事情で少し遅れたセンター25周年，研究科20周年を記念する札幌学院心理臨床センター紀要への寄稿です。「継続は力なり」であり，ひとつの大切なことでもあり祝意を表します。臨床家としての私は歳ばかり重ねて，気づけば45年を過ぎましたが，諸事情より2022年３月で第一線から退きました。ある意味で，宮仕えをはなれ気楽に自由に臨床に専念したいようなところでもあります。

まずは，何よりもいろいろな臨床的教えを頂いた，相談室や病院で何らかのかたちで関わった患者やクライエントの皆さんに謝意を表します。また，札幌学院では18年間お世話になりましたが，センター室員，院生，修了生，先生など多くの人々に支えられてきました。また今まで関わった病院，相談室等のさまざまなスタッフも同様です。あらためて謝意を表したいところです。

ロールシャッハの幅を拡げることとなったMMPIについては，故・田中富士夫先生との出会いと関わりが学びの基本となっており，心からの謝意を表します。最後に，既に故人となった片口安史先生，空井健三先生，秋山俊夫先生に深く感謝します。先生方のおかげで，心理臨床の路を踏みだし，自分なりの心理臨床経験の拡がりとまとまりを進めてくることができました。さらに，心理臨床にからんだ大学教員を務めあげ，多くの後輩にある程度の教えをなすことができました。これらは先生方からの直接的，間接的な指導と支えによるところです。

みなさま，本当にありがとうございます。

Some Free Associations about the Rorschach's Inkblot Test and the MMPI.

by Ide Seigo (2022)

文　献

Dahlstrom,W.G. & Dahlstrom,L.（Eds.）(1980)：*Basic Readings on the MMPI: A New Selection on Personality Measurement*. University of Minnesota Press.

Ellenberger,H.（1954）：The life and work of Hermann Rorschach. Bull.Menmoger Clinic, 18,5.（大槻健二訳（1964）　ヘルマン・ロールシャッハの生涯と業績　ロールシャッハ，H. 精神診断学　牧書房 pp.235-278.）

Freud,S.（1917）：*Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*, S.Fischer Verlag.（懸田克躬・高橋義孝訳（1971）：精神分析入門　人文書院.）

神田橋條治・荒木富士夫（1976）：「自閉」の利用－精神分裂病者への助力の試み　精神神経学雑誌，78(1)，43-57.

片口安史（1960）：心理診断法詳説－ロールシャッハテスト　牧書店

片口安史（1987）：「改訂版　新・心理診断法」金子書房（1987）

中井久夫（1982）：精神科治療の覚え書き　からだの科学選書　日本評論社.

小野和雄（1968）：ロールシャッハ・テスト・サブノート　－Klophfer法，片口法を中心に　医学書院.

田中富士夫（1990）：質問紙法　土居健郎・笠原嘉・宮本忠雄・木村敏（編）　異常心理学講座８　みすず書房　pp.17-69.